

科目名	メディア文化論特講	担当者	ホリエ 堀江	ヒデフミ 秀史	期間	通年	単位数	4
-----	-----------	-----	-----------	------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目的	<p>インターネットが台頭して以降、現在のメディア状況は極めて複雑化し、多様化したように見える。本科目では、メディア文化の中でも、とりわけ〈映像〉に注目し、現代に至るまでにそれが、技術的、思想的にどのような歩みを辿ってきたのかを学び、現代メディアにアプローチするための基盤となる知識と方法を習得することを目指す。</p> <p>前期では、その技術的な発展の歴史を学び（19世紀末まで）、後期では、1960年代～70年代日本で加速度的な盛り上がりを見せた映像論を読む。</p> <p>これらの学習と同時に、本科目では比較文学のディシプリンを経験してもらう。自国の言語（この場合は「国語」としての日本語）を用いた文献の操作方法を学ぶこと、そして、〈映像〉を〈言語〉で表わす営みである映像論（映像の批評）を読み、かつ自らも書くことで、「日本語」という〈言語〉の表現としての可能性と不可能性について考えたい。</p>		
到達目標	<p>メディアの歴史を学び、現代のメディア状況を相対化できるような知識を得る。</p> <p>個別の映像作品に対して、批判的（否定的である必要はない）に思考する視座を得る。</p> <p>1960年代～70年代日本の映像文化に関する知識を得る。</p> <p>現代のメディア状況に対して、自らの抱く批評的な考えを、説得的、論理的に展開するための学術的な書き方を身につける。</p>		
学修方法	<p>教材と関係資料を読み、課題レポートを、教員とのやりとりを経ながら、年間計四本提出してもらう。途中、自ら国会図書館等で関連資料を調べに行く必要がある。</p> <p>基本教材、参考図書以外に必要な資料は、履修後（4月半ば以降）にメール等で適宜指示、配布する。</p>		
スケジュール	<p><前期>教材1を使用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・レポート課題1の最終稿を、7月半ばまでに提出。 ・レポート課題2の最終稿を、9月半ばまでに提出。 <p><後期>教材2を使用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・レポート課題1の最終稿を、11月半ばまでに提出。 ・レポート課題2の最終稿を、1月半ばまでに提出。 		
成績評価	種別	割合	評価基準
	レポート	80%	1, 学術論文としての体裁（引用の方法、注の付け方など）、 2, 論理構成（説得的な論の展開となっているか、文章が読みやすい順番に並んでいるか）、 3, 独創性（問題設定、解釈の内容と方法、文体など） 上記三つの観点から、総合的に判断する。
	平常評価	20%	レポート作成過程での質問や、レポート添削の対応
履修者への要望	<p>映像文化に関する予備知識は必要としない。不明な点、分からないことに対しては、メール等で随時対応するので、積極的に連絡をとること。但し、自ら調べる能力を高める意図もあるので、方法は提供するが、直接的な情報は自ら図書館へ出向くなどして執筆を進める必要がある。</p> <p>レポートは、草稿から最終稿にいたるまで、教員とのやりとりを通じて段階的に進めること。従って、執筆は計画的に進めること。</p>		

【レポート課題】

基本教材 1	
教材の概要	著者名： 1-1, 齋藤嘉博 教材名： 『メディアの技術史 洞窟画からインターネットへ』 東京電機大学出版局, 1999年 著者名： 1-2, 吉見俊哉 教材名： 『メディア文化論 メディアを学ぶ人のための15話』 有斐閣アルマ, 2004年 1-1は、絵や印刷、音を含む、表現やメディアの物理的、技術的な歴史を概観できる。 1-2は、メディア論における学問的な関心を、体系的に学ぶことが出来る。
参考図書	岩本憲児, 高村倉太郎監修『世界映画大事典』(日本図書センター) =図書館で適宜関係項目を読むこと。 安友志乃『写真のはじまり物語』 雷鳥社, 2009年
履修上のポイント	身体感覚として理解し易く、再現も比較的容易なアナログ技術としての映像の発達史を学び直すことで、デジタル技術が遍く行き渡っている現代を相対化する視点を養ってほしい。ただ歴史を「勉強」するのではなく、現代において得られたもの、失われたものは何かといったかたちで、現代に直結する問題であるという意識を持つこと。
レポート課題 1	写真技術がどのようにして生まれたのか、基本教材等を参照して、歴史的な概要をまとめなさい。2000字以上。 留意点 ：科学(化学)的な観点は最小限に留め、人文学的な観点からのみ論じれば良い。(誰が、いつ、どのように生み、その社会的な反応はどのようなものであったか等)
レポート課題 2	課題1を発展させる形で、写真技術にどのような要素が加わって、映画メディアが誕生したのか、概要をまとめなさい。4000字以上。 留意点 ：「定着」、「投影」、「動き」という三つの観点から考えると良い。

基本教材 2	
教材の概要	著者名： 中平卓馬 教材名： 『なぜ、植物図鑑か 中平卓馬映像論集』(ちくま学芸文庫, 2007年) 中平卓馬(1938-2015)は、日本の写真家であり、批評家である。盟友の森山大道とともに、「写真とは何か/何であるべきか」という根源的な問いを抱き、思索を続けた。主に1960-70年代に、先鋭的な批評を著し、写真実作でそれを実践した。アルコールの過剰摂取で昏睡し言葉をほとんど失った1977年以降も、写真を撮り続けた。本書は、その中平が1973年に刊行した評論集の文庫化である。
参考図書	『中平卓馬 来たるべき写真家』(KAWADE 道の手帖), 河出書房新社, 2009年
履修上のポイント	本書に所収される、〈映像〉にまつわる様々な論考を通じて、中平が一貫して主張することはなにかを考えて欲しい。「映像の匿名性」、「方法の優先」、といった概念に注目すると良い。 初出誌まで溯って分析することを義務とするので、その調査の時間も必要。
レポート課題 1	「基本教材2」に集められた批評の内、興味のあるもの1~2本(巻頭論文「なぜ、植物図鑑か」以外)について、詳細に分析しなさい。「詳細な分析」の内容については別途指示。(2000字以上) 留意点 ：写真論、テレビ論、映画論、広告論等があるので、自身の興味のある分野の論文を選ぶこと。批評される対象については、自ら調べそれに触れる(観る)必要がある。
レポート課題 2	巻頭論文「なぜ、植物図鑑か」の議論に関連付ける形で、任意の映画一本(自ら選ぶこと。但し、特別な理由がない限り、実写映画とする)を、自由に論じなさい。3000字以上、上限なし。 留意点 ：あらすじの説明に終始しないこと。つまり、それが「小説」とか「演劇」とかでなく、「映像」であることの意味を考え、それを中心に論じること。その映画を観ていない人が読んで「観たい」と思わせられればなお良い。